昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十八年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二九五号）

慈光

第二十五巻　第十二号

目次

人生真実の渕源……近角常観……(1)
信仰体験録……安波勲八……(6)
畢竟依……山本普道……(11)
念仏詩抄……木村無相……(17)
仏法は無我にて候……花田正夫……(20)

人生真実の淵源

近角常観

近時（大正七年）人生問題の傾向を察するに、極端にまで行き詰って居ることを認める次第である。これを過去に比較するに、日露戦争後に人生問題が行き詰った以後の現象である。しかし当時はその結果、信仰問題が非常に勃与して、所謂見神見仏の実験等の叫びが盛んであった。しかし今回は前の様に未だ信仰問題の勃興をも認めず、却って宗教にそむいて、世間的欲望、物質的成功にはしる傾向でこれは甚だ寒心すべき現象である。

この両者の区別を観察すれば、前回は戦争の悲惨に遇うて、人々は親に別れ子に別れ、生命も財産も何の役に立たぬという消極的極所に陥ったから必然的に信仰的救済によって復活するより外に道が無かったのである。ところが今回は人生問題の行き詰っていることは前回に劣らぬ程であるが、人心の趨勢が前回に比すると正反対である。即ち欧洲戦争の影響として、外貨が我が国に流入し、輸出品はどんな物でもよくさばかれ、物質的欲望、投機的成功等その暴威をたくましくし、人々は皆血眼になって狂奔し、欲望奢侈（しやし）いたらざる無き有様である。それ故人々口を開けば成功を叫び、ねらう処は世間的快楽である。故に宗教的救済を聞いても空想のように考え、消極的気休めの如く受取られて、人生そのものの上に積極的威力を感ぜぬのである。これが現代において宗教に遠ざかる一大原因と思われる。

近頃世上に流行している一種の宗教的傾向があるがこれは真面目な意味で宗教とは云えぬ、むしろ迷信の部に属する。しかし世の智識階級とも呼ばれる者が、滔々としてこれにおもむくの傾きがある。その一種の宗教とは、或は天啓を下して人の運命を予言するとか、或は神秘な方法で病気を治すとか、或は商売繁盛を予言するとか、というが如きほとんど常識をもって信ずべからざることを信じて居る者が多い。しかも世の実業家とか文士とか学者とかいう者が滔々としてそれに趣いていることは非常に注意を払うべ

き現象である。

これ一面から云えば、世人が道理とか常識とか、医薬とかいうものに満足せずして、より以上のものを求める傾向を示すものと云えるが、その根本の動機が、成功とか運命とか病気平癒とか損得とかいうような、頗る物質的世間的結果をねろうて居る処から見れば、決して真正な意味の宗教ではない。つまりは現代人心の弱点に応じて現われた迷信にすぎない。

さて真正なる宗教とは如何なるものであるか、先ず第一に注意すべき点は、前記のような世間的物質的結果を目当とせぬことである。吾等は何人も世間的物質的欲望を持たぬ者は無い。しかし実際においてこれらの欲望が絶対に満足することのないことは事実であって、よしんばたとい成功し得たにしても一種の虚仮不実のことで「顚倒の善果」と名づくべきものである。若し一日これらの善果に耽溺する時は、一日迷いを長からしめるものである。故にこれ等世間的物質的欲望に対しては、絶対的否認を与えねばならぬ、即ち人生の何物も虚仮不実である、こわれるべき無常であることを断言せねばならぬ。

しかしこの事は現代に向つては頗る逆流的の警告である。日露戦争後の当時は一般として信仰に入りやすかったのである。ところが現代は一般としては、みな成功を叫び、快楽をねらうて居る、だから一応二応の警告を為しても、現代の人心に対しては馬耳東風である。故に現時は実際事実的に一大震雷に遭遇し、この虚仮無常なことを見せられるまでは仲々目は醒めないのである。現に日本国民の如きも、欧洲戦争の影響に酔わされて、一時的安逸をむさぶりつつあるが、他日一大震雷の脳天を粉粋することがあるのを覚悟すべきである。

さて斯くの如く人生の何物も頼むべからざること、又何等の意味のないことを極言することは、いたずらに消極的言辞を弄し、悲観的思想を鼓吹するためではない、一大積極的救済、永久的生命の顕現し来ることを告知せんためである。

しかしこの積極的生命、救済的光明なるものは、決して自分で積極的に摑みうるものではない。若しこの方より進みて積極的に摑むものならば、たとい言葉は宗教的であらうとも、世間的物質的積極と何の選ぶところもない。世間の人が、信仰を得たらば強くなれるであろう、安心を得たら苦しまぬようになるであろうと、はじめから信仰の結果を予想して信仰に入ろうとするのでは、世間的成功をねらうのと何の異なる処もない。「極楽は楽しむと聞いてまいらんと思う者は仏になり候わず」とあるのがこれである。この様に信仰の積極的態度は初めより積極的希望を持って

満たされるものでなく、むしろ前に述べた人生的消極、虚仮不実に対する真実の同情の大慈大悲によるのである。

利他円満の大行

そもそも真実というは如何なることであるか。一般に真実ということは正直なことである、うそ言わぬことであると考えられるのである。しかしこれでは未だ真実の要髄を得たものではない。真実ということは、世の不実に対して飽くまで変わらず、飽くまで見捨てぬものが真実である。換言すれば如何なる不実をもって刃向うとも、如何なる虚偽をもって交るとも、絶対真実なるものはこの反対のためにその真実を変えることなく、その虚偽をもって真実をそこねることは出来ぬのである。『歎異抄』に「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」とある。人生の如何なる罪悪をもって向うとも如何なる虚偽をもって交るとも、一歩一厘、如来の真実をさまたぐることが出来ないのである。換言すれば、我等が如何なる不実をもって向うとも、虚偽をもって向うとも、如来の同情を滅殺することは出来ぬのである。即ち如来の真実は人間の罪悪のあらん限り飽くまでこれを見捨てざる真実である。

如来の真実は人間の罪悪のあらん限り飽くまでこれを見捨てざる真実である。如来の清浄は浊悪の我等を飽くまで清むる処の源泉である。かくの如き如来の真実の源泉を名づけて、浄土真実の行、即ち他力大行の南無阿弥陀仏というのである。これ実に他力浄信の渕源にして、利他円満の大行、即ちこれである。親鸞聖人は『教行信証』の行巻一部において、この大行を闡明せられたのである。

行巻劈頭に言わく「謹んで往相の廻向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行は則ち無碍光如来の名を称するなり。斯の行は即ちこれ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満（ごくそくえんまん）す、真如一実の功徳の宝海なり。故に大行と名づく」

そもそもこの如来の本願力廻向ということが、我等浊悪不実の者に向って、如来の清浄真実の親心の顕現である。

無明の大夜をあわれみて法身の光輪きわもなく
無碍光仏としめしてぞ安養界に影現する

実に本覚明了な一如法界の仏の境界から、凡愚底下の無明闇黒の我等をみそなわす時は、我等が酔えるだけそれだけこれをあわれみ給い、眠れるだけそれだけこれを憐愍し給うが、即ち選択本願の親心である。その選択本願の親心のままを顕現したものが、南無阿弥陀仏である。

聖人が「即ちこれその行なり、というは選択本願これなり」と言われたのが、願心即ち大行たることを闡明せられ

たのである。

而してこの南無阿弥陀仏の六字は、その名に顕示されたる意義があるのである。故に我等が南無阿弥陀仏を称えて如来を讃歎する時は、いたずらに声に出して称えるばかりではない。彼の光明智相の如く、彼の名義の如く、実の如く修行し相応せねばならぬ。即ち単に無碍光如来のみ名を称えるばかりではない。その無碍光仏の意義を信知し、又無碍光仏の光明に接触して、その如来の真実を実験することである。

故に、如実修行相応というのは、如来はこれ実相身なり為物身なりと知るなりと釈せられてある。これ即ち実相一如の境界より顕現して、五浊凡愚の我等がために現われ給うた清浄真実の如来でましますことを心に実験し頂くことである。「聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめし立ちける本願のかたじけなさよ」と、述懐せられたるは、実に聖人が「如来はこれ実相身なり為物身なり」と知られたのである。これがいわゆる如実修行相応である

一度びこの如来の真実心を頂けば、忽ちここに破闇満願（はあんまんがん）の徳を与えられるのである。強いて云えば、破闇というは人生の消極的方面に向っての如来の真実の同情である。満願というはその同情をもって、飽くまで人生の悲哀を和げその真実をもって人生の不実不浄を転じて円満充実の結果をもち来たさるるのである。

この如き如来清浄真実の渕源であるから、上記行巻の文に「斯の行は即ちこれ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり極速円満（ごくそくえんまん）す、真如一実の功徳の宝海なり。故に大行と名づく」と言われた所以である。

五浊悪世の有情の選択本願信ずれば、
不可称不可説不可思議の功徳は行者の身にみてり

これ実に五浊悪世の我等が心に、如来選択の願心の徹底したる有様である。

そもそも如来の選択の願心は、いずれの行もおよび難き我等をあわれみ給いて、飽くまで見捨てたまわぬ唯念仏の一行である。全体選択本願という言葉の中には前記の消極積極の両面が具っている。

法然上人『選択集に』何故如来は念仏の一行を選択したるかとというについて、二義をあげてある。一つには勝劣の義、二つには難易の義である。これを一見すれば頗る法門沙汰のように考えられるも、深くその意義を味えば、信仰の実験における積極消極の両面をあらわせるものである、先ず難易の義というは、諸行は難く念仏は易し。もし起立塔像をもって往生の行となせば、貧窮困乏の人々は往生

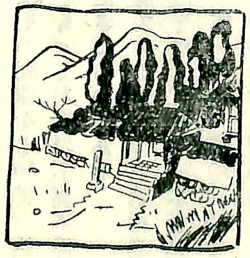
の望みを絶たん、もし持戒持律をもって往生の行となさば破戒無戒の者は往生の望みを絶たん。もし智慧高才をもつて行となさば、愚痴無智の者は往生の望みを絶たん。ここにおいて如来の願意、貧窮困乏、破戒無戒の者のために、持ち易く称え易き念仏の一行を選び取り給うなりという。これ如来がありとあらゆる我等の消極的方面をみそなわして見捨て給わぬ一面をあらわしたるものである。

而してその消極的方面を飽くまでおぎない、飽くまで満たしめ、終に満足せしめずば止まぬというが、即ち信仰の積極的方面である。これを闡明したるが即ち勝劣の義である。勝劣の義というは、諸行は功徳ありと雖も一部分に過ぎず、所謂少善根少福徳の因縁である。又我々が実行の上より考えて見ても、戒律といい智慧高才といい、我々は絶対に実行することは出来ぬのである。しかるに念仏の一行は、諸の善法を摂し、諸の徳本を具え、上に挙げた破戒無戒、愚痴無智なるものを飽くまで見捨てぬ大慈大悲の大善大功徳の、円満具足したる積極的同情の真実の力である。五濁悪世の我等も一度この大慈大悲の力に遭い奉れば、忽にして衷心満足せしめらるるのである。たびたび繰返す譬喩の如く、我等は真言止観の果実を拾う能わず、持戒坐禅の堅きものを食すること能わざる大病人である。これ即ち消極的方面である。大病人を哀れみてこれがために態々作り給うたのが、南無阿弥陀仏のお粥である。このお粥はかくの如き重態の病人に食し易いように作られたのみならず、その粥の中には滋養分もあれば諸の味わいもあり、あらゆる功徳のみちみちたる絶対の恵みなれば、如何なる病気も如何なる衰弱も忽ちにして癒やされるのである。

本願力にあいぬれば　空しくすぐる人ぞなき
功徳の宝海みちみちて　煩悩の濁水へだてなし

とあるが、実にこの積極的充実の真味を歎ぜられたものである。これが人生上に実現されたのが、即ち信仰生活である。心多歓喜（しんたかんぎ）の益である、心光摂護（しんこうしようご）の益である、転悪成善の益である。これ実に本願招喚の勅命に徹底せられたる一念帰命の法悦慶喜の人生を実現し来るのである。現代の物質的、世間的欲望の人生を一転して、この充実満足の生活を持ち来すことが、国家緊急の問題である。

『求道』　十四巻　第一号より。



信仰体験録

故・安波勲八述

はじめて仏に会う

自分の悪い所を見て悪いからいかぬと云わずして、その悪い所を何処までも同情して下さるお方があれは私は助かる。なければ助からぬということは早くから分ったが「其仏があるかないか、あれば証拠が見たい」これが二三年来の唯一の疑問であった。

東京で近角先生のお話を聞いても、東陽和上の御教化を受けても寺の説教の御縁に会うても、座談会で皆様のお話を聞いても、結局は「それでは仏はあることになったのか無いことになったのか」という疑問だけが何時も未解決のまま残された。

大正十二年の春であったと思う。或日、汚い話であるが便所の中で計らずも此問題が全く解決され、爾来信仰上の問題について何らの疑問もなくなったのみならず、すべての日常、実際問題についてうなづかれる様になった、私はこの時はじめて仏の真実が私に届いたのであると信じている、

○かような仏が確かにあることが私に信ぜられた、その理由は何であるかは知らない、ただしかしその前後の心持を書いて見ると、

仏があるか無いか証拠を見たいなんて何処を探していたのだ。確かな証拠があるではないか、近角先生が現に安心立命の生活をしていられること、そのことが仏のある証拠ではないか、先生が人生問題に煩悶していた時に、学問でも、理屈でも、何物でも解決が出来なかったのが、仏に会うてはじめて解決が出来た。仏に会うても絶対的解決が出来ないならば仏は無いものかも知れぬが、絶対的解決の出来ていることが仏のある何よりの証拠ではないか」

近角先生が安心して居られることについては何らの疑いはない、先生の思想の全体が私にわかることが信仰であるとすら考えた程である、しからば仏のあることは間違いがない。先生が「俺は仏に会って来たのだ」といわれた意味

がはじめて了解せられた。私もこの時はじめて仏に会うことが出来た。誠に不思議である。

（大正十五年六月二十一日稿）

人生問題と生死問題

久しく悩まされていた人生問題は一度仏に会うて以来全く解決された。信仰上の唯一の疑問であった仏があるかないか、仏のある証拠を見たいという問題は勿論、毎日起る実際問題につき私の心の問題、他人の心の状態、世の中の現象がすべて肯定せられるようになった、これは明らかなる事実である。仏に会わないまでは「どうしてこんなだろう」と思われることばかりであったが、仏に会ってからは如何なる場合でも「なるほどそうだ」と合点せられるようになった、

東陽和上はその頃までは修道会の大会とか、御正忌とか沢山の人の集る時は、ただ混雑して騒々しいだけだから水崎詣りはやめなさいと私に対して云っていたのが、その頃からは忙しいだろうが大会には是非出て来て何か感想を述べよと云われるようになった。

またそれから後、私の感想について此処がおかしいと訂正されるようなことは全くなかった、なるほどそうだ、とすべて賛成して下さり、喜んで聞いて下さり、そして時々「しからば死の問題は如何ですか、死んだらどうなりますか、地獄極楽については如何にお考えですか」と切り出されるのが常であった。私はそのたびごとに答えた、

「生死問題についてはすでに解決されていたと思ったのは間違いであって、まだ私の実際問題となっていないのであるということは、かつて近角先生の診断によって明瞭になった。然し相変らず生死問題は私の実際問題とはなりません。それで和上様から左様に云われても、私は生死問題も地獄極楽の問題も本当にまじめに考えたことすらありません、従って何ともお答えが出来ません」

「今貴方が死ぬるとしたらどうなるかと一つ考えてごらんなさい」

「和上様、それは御無理であります。私の頭は頑固でありますから、そんな仮定の問題で頭をはこぶことは出来ません。ただ教義の上から死後はどうなるかということは云えないことではありませんが、それは私の考えでありません、私の頭でそんな問題を考えて見ようとしても私の頭は一歩も進みません」

と無遠慮に答えるのを常としていた。

「それは仕方がありません、しかしいつかはそれが問題になってくることがある」

とてこの問題を打ち切るより外はなかった。

和上のこのお尋ねは一度や二度ではなかった。しかしそ

の都度私は同じ返事をくりかえしていた。

私自身もいよいよ生死が私の実際問題になった時は、私の人生問題を徹底的に解決して下さっておる仏の慈悲によって解決がつくに相違ないと想像はしているが、しかし実際になって見なければわからぬと考えていた。然し生死問題については未解決のまま何等の不安もなかった。

（大正十五年六月二十九日稿）

妹の死に際して

遂に和上様の念願していた日が来た。大正十三年秋、私の妹が突然病気になって僅か四十日ばかりで此の世を去ったのである。

その時、母と一番上の姉は、どうせ無い命ならば、生きている内に仏のお慈悲を戴かせたい。私に仏のお慈悲を妹に説けと云われた。その時に私は行き詰った。私にその際お浄土ということがはつきりして居たならば、また死んだら仏の慈悲で必ずお浄土に参られると信じられているならば妹に話す言葉があるが、私はこれについては何とも自信がない、それで妹に話す言葉がなかった。

そのことを信仰の座談会の席で申しましたところ、その時の和才誠司大尉のお言葉が私によくはいりました。

「私は極楽があるかないかということは学問としては知らぬが、信仰の上からはたしかにあると断言出来る」

「私にはそれが出来ぬから困っている話されぬのです」

「この私をいつでも引受けて下さる仏があるということが極楽のあるということではないですか。何もお前は到底助からぬというて病人を驚かせぬでもよい、何ともしようのない者を見捨てぬ－何時でも如何なることがあっても－というお慈悲のましますことを話したらよいではないですか」

といわれた時に、私にお浄土という意識がはじめてはつきりしてきた、成程そうだ、極楽が何処にある、どんな処だということは学問上のことだ、理屈のことだ。この何ともしようのない私をいつでも救うて下さる仏の存在するということが、この世では安心立命の生活の出来ることであり、この世を去れば極楽の世界だということだ、お慈悲の上からは此の世と極楽との区別はない、唯人間の身体をして居る間が娑婆で人間の身体の形を失うた時が極楽だ、生きようが死なうが、地獄に落ちようが、極楽に居ようが、この私をいつでも相手して下さるお慈悲のおわしますことに間違いはない。

私は妹の生死問題によって私の生死問題がはからずも解決されたことを喜んだ。次の座談会の席上、和才さんに私の頂いたところを聞いて貰うと和才さんは大変喜ばれた、あとである人に「安波は私の話したままを了解してくれた

こんな嬉しいことはない、自分が百万円の財産を得たよりも嬉しい」と話されたそうである、

水崎の和上にこのたびのことをくわしく話し「かねて和上様がご心配下さった私の生死問題がかたづきました」と申して教を乞いましたら、和上様い、

「そうでしたか、それはよかった」

と大変喜んで下さり、

「お慈悲を通して極楽の存在を信ずる、それが順序ですなあ」と申されました。

終りに和上様は「汝は浄土真宗の全体の目的を達した」といって喜んで下さいました。

（大正十五年七月一日稿）

生死巌頭に立つ

和上様が何時もお心にかけて下さつていたが私には一向呑気であった、私の生死問題がかくも楽々と片附きましたのは誠に意外である。これ全く妹がかような急病にかかり身をもって教えてくれたお蔭に相違なく、また和上様のお真実がとどいたからに相違ない、これとりも直さず仏心の顕現である。その当時の感想はかって雑誌「ふたば」に掲載した。

翌大正十四年二月にはからずも恩師東陽和上の急死にあい、私の世渡りの燈火を失いたる如く、誠に淋しさを感ずるのであるが、一方においては和上は私に対してもう用事が無くなったから浄土に還帰されたのであるとも思われた

同年秋、思いがけなく身みずから胃癌にかかり、しかも手術の時期を失し、医師が死の宣告をなし余もまた死の宣告をそのままうけ、所謂真の意味の生死巌頭に立てる時、私の生死問題がすでに解決されたるを体験し、誠に嬉しかった。それについても特にありがたく思われるのは一年前の妹の死である、もしも妹の死が無くて私の生死巌頭に立ったならば、斯くまで立派に解決はついて無かったであろう、顧れば当時東陽和上はすでに遷化し、和才少佐は久留米に転任して不在、私の生死問題はどう片附いたか分らない、誠に何もかも御縁である。

かくの如く私は人生問題により仏の慈悲を仰ぐことが出来たのでがるが、然らば生死問題に際しては別な経験が必要であるかと云うにそうではない、生死問題もまた人生問題を徹底的に解決する仏の慈悲を仰ぐより外に道がない、換言すれば人生問題が徹底的に解決されておればすでに生死問題も徹底的に解決されておる。人生問題だけが解決されて生死問題が解決されていない筈がない、人生問題だけは解決されたと思って居る人がいよいよ生死巌頭に立って生死問題が解決されてないことを見出したならば、その人の人生問題の解決も不徹底であったと云わねばならぬ。

東陽和上は常に言われた「死生は一枚の紙の裏表である生が解決されて死の解決せざることなく、死が解決されて生の解決されないことはない」誠に和上様のお言葉が味わわれる。

然し、信力の偉大なることは生死問題に直面してはじめて感ずることが出来ると云わねばならぬ。勿論平常に人生問題において仏の慈悲の広大なるを仰ぎ信の力を感ずるのであるが、はじめて生死巌頭に立ちて信力の偉大なるにはみずから驚歎せざるを得ない、死という逆境が大きいだけ力を感ずることも喜びを感することも大きいのであろう。平常、ああそうかとうなづかれたことも成程そうかと強くうなづかれ、出るお念仏も力強いお念仏が底から湧いて出る。この時の感想は拙著「死の宣告を受けて」に詳説してあるから略しておく。

（大正十五年七月二日稿）

お慈悲とお浄土

お慈悲とお浄土の問題は、一昨年の秋、妹の死に際会して私には解決された問題であるが、こんど死の宣告（胃ガンにて手術不能）を受けて、生死巌頭に立ちても、私には死んだらお浄土にまいられるというよろこびは少しもないそこで私の体験を聞いて私の信仰上ひよっと間違いがあってはならぬと心配して下さる信友は、はじめ私の浄土観念について疑いをおき、色々と注意してくれた。私の最後の目的はお浄土に往生することにあるのだから当然のことである。和才さんも、麻生先生も、松本同行もみなはじめはそのことを心配して種々御教化をたまわった。

本年三月二十八日、最後の水崎詣りのみぎり、雲山和上に面謁出来た、その節短時間であったが私の信仰を聞いていただいた。和上はただちに私に浄土観念の薄いのを見てとられて、次のような質問を発せられた。

「この何ともしてみようのない私をいつまでもお相手下さるお慈悲を喜ぶのと、そのお慈悲によって死んだらお浄土に参られることを喜ぶのと二通りあるが君のは何方だ」

「私の今の喜びはどちらかとお尋ねならば、この何とも仕様のない者をお見捨てなきお慈悲を喜ぶばかりであると答えねばならぬ、勿論『仏語に虚妄なし』死んだら必ずお浄土に参れることに少しの疑いもない、また真の真実は必ず顕現する、東陽和上も、真の真理は必ず現象すると常に仰せられた。私を何時もお見捨て無いお慈悲の顕現が、即ち荘厳仏国土である。それでお浄土の存在には少しの疑いもないが、私には今死んだら間違いなくお浄土に参られるからといえ、喜びは少しもない、私は今死の宣告を受けて大きな逆境を背負うている、それにもかかわらず平常の生活と少しの変りなく、つまらぬ事に妻に腹立たせ、つまらぬ

欲を張って相変らず浅間しい生活をしている。この者をあきれずに相変らずお相手下さるお慈悲がまことに有難い、このお慈悲を何時も喜ばしていただき、このお慈悲によって今私は強く生かされています」

とお答えしたら、和上は

「実際今のお境遇ではそうでしようなあ、そうでしようなあ……」

と強くうなづかれて大変よろこんで下さった。

和才さんも、麻生先生も私の心持をよく聞いて下さってお浄土に対する疑問は氷解された。

二月下旬、私の重患を初めて聞いて、和才少佐ははるばる久留米から訪ねてくれ、前述のように信仰上私に間違いがなければよいが、又療病の態度についても色々心配して下され、家族の身の上のことも種々注意して下さった。帰ってからも度々筆をとってお浄土の存在をしきりに主張して私を導いて下さった。それが私には誠に嬉しかった。他の人は、私が死の宣告を受けても泰然自若として従前通り診療に従事して居るのを見て、信仰は偉大なるものであるお慈悲はありがたいと、私の善い方のみを見て喜んでくれるが、和才さんは信友ならばこそひよつと私に間違いがなければよいがと心配して下さることは誠に有難い、

四月二十四日、再度訪問して下され、翌日、別府、大分の求道会同人を語らい、私と家族のため盛大な慰安送別会を催して下さった。その時私は感じた。真の真実は必ず顕現する、和才さんの私に対する真実は真の真実であるから久留米からわざわざ二度も訪ねて下され、慰安会や親切な言動となって現われたのである。第一回の時は、浄土の存在を教義の上から教えて下され、こんどは真のお慈悲は必ず荘厳仏国土として顕現することを事実の上に示して下さったことを感じて誠に嬉しかった。

五月八日、同行に連れられて大分に行き、日頃恩顧を受けた求道会の席上で二時間ばかり私の体験を聞いて貰った。その席で松本同行は私がお浄土に参ることが確かに分ったそうで大変よろこんでくれた。「先生も私の参る所に参られることが分った」と喜んくれ、私は長い間ともに道を求めている同行から私の心持が了解されたのを知って嬉しかった。云々。

（大正十五年七月八日稿）

畢竟依

共是凡夫のみ

——瞋恚と反省——

山本普道

聖徳太子の御言葉

仏教では三毒の煩悩といって、私共の見苦しい心の動きの中で、ことに、貪欲と瞋恚と愚痴とを戒められてあります。その中でも、私は生来、気の短い気質で、ともすればすぐ立腹して、人を苦しめ、自分も苦しんで参りました。

仏法を聞かせて頂くようになってから、この瞋恚が如何に見苦しいものであるかということを教えられましたが、なかなかこのくせが直りませぬ。こんな私には聖徳太子の十七憲法の中の次のお言葉はことに身にします。

十に曰く。忿（こころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄て、人の違うを怒らざれ、人皆心あり、心各々執れることあり、彼れ是（よし）みすれば則ち我は非（あし）みす。我れ是みすれば則ち彼れは非みす。我れ必ずしも聖（ひじり）に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ、よしみし、あしみするのことわりなんぞ能く定むべけんや、相共に賢く愚かなること鐶（みみがね）の端（はし）無きが如し。

是をもって彼人はいかるといえども、還って我があやまちを恐れよ、我ひとり得たりといえども衆に従いて同じく挙（おこな）え。

忿とは、心のいかりであります。瞋とは、それをおもてに出して顔色をかえることであります。何故そんなにいかるかというと、人がこちらの思うようになってくれないからであります。しかしこんな感情の動き方はあきらかに我儘であり、傲慢であります。太子はねんごろにそれをさとしていて下さいます。

十人十色

人が自分の思うようになってくれぬときに先ず考えねば

ならぬことは、人は皆、一人ずつちがう心を持っている。だから各自その人らしい考え方によって生きているものであるということである。十人十色という。一寸の虫にも五分の魂はある。だから匹夫（ひつぷ）もその志を奪うことは出来ない。

だから一人ずつ顔色がちがうように、考え方の相異ということは当然あるべきことである。だから彼が是とするところに必ずしも我は賛成しかねることもあり、我が是とすることに必ずしも彼が賛成してくれぬこともある。ここに意見の衝突が起こり、忿怒の原因が発生する。

しかしこの時先ず反省しなければならぬことは、自分の意見が必ずしも常に正しいとはきめられない。何となれば自分は必ずしも聖者ではないから、時には感情で動いたり利害で左右されていることもある。又人間の力には限りがあるから、自分の見方が必ずしもあたっていないかも知れない。だから自分では正しいつもりで実は判断が間違っていることも多い。

又自分の意見に反対している相手が必ずしも愚者とは限っていない。自分の考えを理解し賛成せぬのは皆馬鹿者であるなどと決して思いあがってはならぬ。仏様の鏡の前に立ってふりかえれば、彼も我も共に是れ煩悩具足の凡夫である。是非善悪を判断している肝心の「自分」という尺度が、時々あてにならないことがある。

だから凡夫同志が自分だけは正しいとうぬぼれてきめた是非善悪は、決して窮極の権威あるものではない。然るにこの点に対する反省を欠いで、自分だけが正しいと両方が主張し、お前だけが間違っていると各自が言い争うならばその議論の涯てしないことは鐶（みみがね）に端の無いようなもので、いつまでぐるぐるまわっても解決はつかぬ。

だから相手が瞋った場合でも、これに応じて直ちに立腹せずに、一歩さがって、自分も聖者でないから、何処かで相手をいからせるような過失を犯したのではあるまいかと反省してみることである。そして思い当ったら素直にわびることである。

相手が考えちがいをして、こちらの気持が分らずに怒っている時には、自分もこの人のように早合点で立腹して人を傷つけていることであろうと反省の手がかりにすることである。又まわりの者がわからずやばかりで、自分がひとり道理を会得している場合でも、彼等を軽蔑して独断専行しないで、なるだけ皆と歩調を合わせて歩きつつ、何時しか事を正しい方向に持っていくことである。

信心の智慧

この行き届いたおいましめは、私にとってことにありがたい反省の鏡となって下さいます。

省みますと、私が立腹する時の気持は、大抵、自分が正しいとうぬぼれている時です。或は相手を見下して軽蔑している時であります。傲慢であり、我儘であります。

「共に是れ凡夫のみ」との太子の御一言は鋭く私の胸を刺します。この鏡によって自分が凡夫であると知ればへりくだった態度が生まれます。相手も凡夫であると理解すれば、ひろく温かい思いやりの心が湧いて来ます。ここに万人が謙虚に、労りあい慰めあって生きるなごやかな道がひらかれます。其処にこそ自他共に美しく生きのびる道が展（ひら）けて来ます。

然るに、私共は、常に、共に是れ凡夫のみということを忘れ勝ちであります。これを照らし出して下さるのは、他力廻向の信心の智慧であります。

反省させられても、反省させられても、何時も其場限りで、同じような見苦しい過ちをくりかえす自分であることを思うとき、度々信心の溝をさらえて、弥陀の法水を流すより外に道なき私であります。触光柔軟（そくこうにゆうなん）ならしめんとお誓い下さった御本願のおなつかしきことであります。

（昭和十七年九月）

編者註、前国連事務総長ウ・タント氏が、就任最初の挨拶に「自分は正しい、相手は悪いだけであれば、最後は力と力との対決となり、戦争した挙句、強い者が正しいとなる。これでは国際連合を結ぶのも存在価値はない。互に自分も不完全なことを省みて、話し合いも出来、そこに共通の場も出来る」と述べたことは、私の耳に深くきざまれているが、同時に太子のこのお言葉の尊さに心うたれました

眞実一路

——ただ一つの生き方——

行路難

ある角度から見れば、人生は涯てしない苦しみの海である。中でも人と我との間の心のもつれで苦しむほど辛いことはない。

支那の詩人は「行路難、行路難、山に非ず、水に非ず、唯在り人情反覆の間」と歌った。まことに人の世の苦しみの大部分はもつれて解けぬ心の摩擦の中にある。これに対してどう処したらよいか、これは万人に課せられた大きな謎である。

こんな時は、もつれてとけぬ苦しみの糸をあわてて解こうとせぬことである。相手を責めたり、弁解したりせぬことである。じっとその苦悩を抱きしめて時の熟するのを待つことである。

そして相手を責める前にそんな結果を生み出すまでの自

分の身口意の動いたあとをおちついて考えてみることである。相手がたとえどうあろうとも、その相手を縁として五分五分に「我」を出しあって、この結果を生み出した自分をかえりみることである。必ずそこにはあやまらねばならぬことの数々がある。相手がよしどうあろうとも先ず自分のあやまちをつきつめて、あやまるべき点をあやまりながら、改めて誠心誠意、真心一つを打ちこんで、相手に求めずに生きて行くことである。そして時を待っことである。真心が強いと、縁だにあればきつとうけとって貰える時が来る。若し来ずに此の世を終えようとも、少なくともこの道をあゆむ人は、自分だけは落ちつける。

いつわりや、やせ我慢の上に築かれた人生はきつと何時かは壊れる。最後まで光るものは、真実だけである。ひまがかかってもよい、分ってもらえなくてもいい、馬鹿だとののしられてもよい。黙々として真心一つを運んで生きて行くことである。時がきつと来る若し相手には届かずとも。真実一路を辿りて倦むことなき人は高く深い如来の御真実心にきつとめぐりあって救われる日が来るであろう。

三つをあざむくな

そして、まごころこめて生きるには、どうすればよいだろうか。釈尊は善生女に次のように教えて下されてある。まごころこめて生きんとするものは、常に三つのことに注意せねばならぬ。

その一つは、他人をあざむかぬことである。

その二つは、自分をあざむかぬことである。

その三つは、仏をあざむかぬことである。

と、これはまことに行き届いた御教化であると思う。

いつわりの上に建設された人生は、きつと亡びることを覚悟せねばならぬ。世間位だまし易いものもないが、又世間ぐらいだましにくいものもない。一時はうまくごまかしおうせたように見えても。どこかに鋭い眼を持った人がいて、きつと何時かはインチキを見破ってしまう。その時が亡びの時である。おそくても、骨が折れても、一歩一歩、真実を打ちこんで生きることである。それのみが末通る生き方である。

次には自分をあざむかぬことである。他はだまし得ても自分の心のとがめるのは、何ともならぬものである。心にとがめることがあっては眠りて安らかならず、食うて味がない。其処には生き甲斐ある人生は無い。不幸にして他をあざむくことがあっても、内にとがめるこの悩みをごまかしてはいけない。これを無視して生きているのは最早人生を建設しているのでなくして、自ら人生を亡ぼして行っているのである。

次には仏をあざむかぬことである。他と自とはあざむき

得ても、仏は決してあざむくことは出来ぬ。いかにかくしても、如来の眼は覆えない、如何に秘めても如来の耳はふさげない。いかにごまかしても如来のお心はすべてをしろしめす。粛としてつつしむべきは如来の見聞知である。おちついて仏さまの拝まれるような一日一日をおくる様にしたいことである。

二種の真実

しかるにここに一つの大切な問題がある。われらは果たしてこの真実一路を終りまで生き抜くことが出来るであろうか？　これは恐ろしい謎である、真実ということを厳かに考える人ほどこの謎は深まる。

親鸞聖人の宗教は、この謎の解決であった。自力の真実のありつたけを打ちこんで生きて行きつつ、他力の真実の宗教の前に、謙譲に聞法の一路を精進する人は、必ずこの謎を解くことが出来るであろう。自力の真実が末通らぬところに人間の深刻な涙がある。その行き詰りの涙の上にこそ、他力の真実、南無阿弥陀仏は廻向されてある。このことを聞き開いた人は「わるからんにつけてもいよいよ願力をあおぎまいらせつつ」かかる我と人とを捨てたまわざる如来の御真実心に救われ、支えられて、歩ませていただけるであろう。

ここ一つにお浄土まで生き抜く、他力真実の一路があるぞ、と親鸞聖人が御教え下さるのである。

（昭和十七年八月）

徒然草

（百十二段）

……人間の儀式、いずれの事か去り難からん。世俗のもだし難きに随いてこれを必ずとせば、ねがいも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさえられてむなしく暮れなん。

日暮れて道遠し、吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、礼儀をも思わじ。この心をもえざらん人は、物狂うともいえ、うつつなし、情なしとも思え。そしるともくるしまじ、誉むともきき入れじ。

全　上　（三十五段）

手のわろき人の、はばからず文かきちらすはよし。みぐるしとて人にかかするはうるさし

全　上　（三十八段）

つらつら思えは、ほまれを愛するは、人の聞きをよろこぶなり。ほむる人、そしる人、共に世にとどまらず。つたえきかんひと、又々すみやかに去るべし。誰をかはじ、誰にか知られん事をねがわん。ほまれは又そしりの本なり。身の後の名のこりてさらに益なし。これを願うも、おろかなる人なり。

仏詩抄

木村無相

還相 (一)

——末讃を載きつつ——

〃ナムアミダブツの回向の
恩徳広大不思議にて
往生廻向の利益には
還相廻向に廻入せり〃

わたしがあらわす
還相は
未来のほかは
ありませぬ
ただただ未来と
言ったとて
わたしが死んだ
その時で
とおい未来ぢや
ありません

わたしの未来は
ナムアミダブツ
ただ念仏の
身となって
この世であなたに
遇（あ）うのです
ナムアミダブツは
によらいさま
ナムアミダブツは
未来のわたし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

還相 (二)

〃像未五濁の世となりて
釈迦の遺教かくれしむ
弥陀の悲願ひろまりて
念仏往生さかりなり〃

往生　往生
言うけれど
死ぬるんでない
生きるんですよ
生まれかわって
生きるんですよ
やはり此の世に
かえって来て
やはりあなたと
語るんです

ただ　ただ　未来は
此の身ぢゃなく
ナムアミダブツの
身となって
あなたに語り
かけるんです
ナムアミダブツが
未来のわたし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

還相 (三)

〃弥陀の尊号となえつつ
信楽まことにうるひとは
憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもいあり〃

尊号　尊号
ナムアミダブツ
念仏往生
信ずるひと
信楽まことに
えたるひと
尊号信ずる

身とならば
やがてはみ名の
身とならん

やがてはみ名の
身と知らば
ナニカにつけて
ナムアミダブツ
憶念の心
つねにして
仏恩おもう
ことならん
仏恩おもう
ことならん

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

還　相　㈣

〃如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も
骨をくだきても謝すべし〃

ナムアミダブツの
一つにて
往還二益（にやく）を
たまいたる
によらい大悲の
恩徳と
それを称（たた）うる
師主の恩
粉骨砕身（ふんこつさいしん）
報ずべし

されど粉骨
砕身の
かなわぬ凡愚の
身にあれば
ただ　ただ　弥陀の
名願を
たのみて未来
還相の

身となり恩徳
報ずべし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

仏法は無我にて候

花田正夫

親鸞聖人御生誕八百年の年も暮れようとしております。九十年の御生涯をとおして諸仏如来出世の本意、弥陀仏の本願を光闡して下さつたのでありますが、この真意を日本の津々浦々まで浸透して下さつたのが中興の祖、蓮如上人の御恩であります。

さて上人の御勧化の中心の三本柱は、一心帰命、称名報恩、仏法無我でありました。一心帰命とはいずれの行にても生死の迷いをはなれ得ない私共をしろしめして、弥陀一仏が救済の御手をさしのべて下さることを聞き、他力の悲願をいずれの行も及び難き我身の上に頂き、余の方へ心をふらぬことであり、称名報恩とは、称名してたすかろうとすることでなく、弥陀仏の大悲の至極がとどいて、「念仏も申され候」と、ありがたや尊やの心の自然の声、讃仰の声であり、これで浄土真宗の特長をあかして下さつたのであります。最後の仏法無我とは、聖道、浄土の門をえらばず、所謂仏法の法印、旗じるしで、他の教にない特徴であり、仏法の本来の面目であります。

蓮如上人がこの仏法無我ということを常に仰言つたことは御一代聞書の随所に見られますが、これというのも親鸞聖人によつて念仏成仏の道が完全に顕彰され、そのみこころを受けられた上人が、愚痴無智のあさましい者に徹底して解り易くかみ砕いて法乳を与えられ、やがて真宗が勃興の機運になつた時、人々が自分のせいにし、手柄としてわれよし、われなせり、われはよく心得たり、等々の我執我慢の角突き合わせが随所に見られるにつけて

「仏法は無我と仰せられ候。我と思うことはいささかあるまじきことなり。われは悪しと思う人なし。これ聖人の御罰なり」

等々と、きびしく誡め、聖人のみこころに帰るようにと切々としたお叱りとなって現われています。

さて、親鸞聖人の信徳にふれる者は、「親鸞別にめずらしき法をひろめず、如来の教法われも信じ人にもおしえき

かしむるばかりなり、親鸞弟子一人も持たず候」「唯可信斯高僧説」「よき人の仰せを蒙りて信ずるより外に別の子細なきなり」等々御生活全体に無私なお姿がしらされるのであります。蓮如上人は御自らこの祖師聖人の徳風を渇仰せられ、われひと共に念仏成仏の道を辿られたのであります。

おもいますのに、無我の人をとおして永遠なる光明が輝きます、有我の者の力で消すことの出来ない真実が顕現されます。又無我の人から小慈小悲の心は陰をひそめて大慈大悲心が返照されまして人の子の上に働いて、力となり支えとなり、いのちそのものになつて下さるのであります。

他山の石として、無私なものを挙げると、孔子は「述べて作らず、集めて大成す」と云って、三皇五帝の教を述べ集めたばかりであると告げています。ソクラテスは「自分の道は産婆術である」といって師の礼をこばんでいます。産婆は胎内に宿る児の産まれ出る助けをするばかりで、各人は皆尊い智恵を持つている、その出現を手伝うばかりで、別に立派なものを自分が持っていてそれを頒けたのではないと繰返しています。エマーソンは、人が真実なものを見出した時、自分が加えることも減ずることもない、唯真実のひとり働きがあらわれる、と云っています。

更にリンカーンが奴隷解放の偉業に成功した時、ストウ夫人を招き「貴女ですかあの力強く世界の人々の心をうつた奴隷のトム叔父さんの小屋を著わした人は」と柔和な夫人の人となりに驚いてたずねると「いえ、私が書いたのではありません、私のようなものが書いたものがどうして人々の心をうちましようか。あれは悲惨な奴隷生活の上にあらわれた神の言葉をしるしたので、私は単なるペンホールダーにすぎません」と答えたことは有名な感話であります

二千五百余年をへた今日、一切の人々の燈炬となつて不滅の光りがあらわれるのも「仏法無我」の徳音であるからであります。

さて、この無我を身にうけるについて、聖道門は、戒・定・慧の三学を究めおさめるのであります。まず戒を持って生活をととのへ、自然にしずかな、平らかな心、禅定に入り、やがて風波の立たない鏡のような境界から、柳は緑、花は紅という、正しい智恵がひらけ、身びいきな心、我賢しとする慢心が消滅し、我は卑しとする卑屈の泥が洗われるのでありましよう。

ところが、聖覚法印の誌された源空上人伝に、上人三十五年の学問の末「入門は異なると雖も皆仏性の一理を悟顕すことを明す、所詮は一致なり、法は深妙なりと雖もわが機すべておよび難し、経典を披覧するにその心ひるがえってくらし、朝々に定めて悪趣に沈まんことを恐怖す、夕々

に出離の縁の欠けたることを悲歎す云々」と四十三歳の絶対絶命の行き詰りの末に、奈良、叡山の学者智者を訪ねて十悪愚痴の者のたすかる道を問われたけれど誰一人としてそれに答えて下さる人はなかったのであります。幸に源信僧都の往生要集によって善導大師の観経疏を身読され、

「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや！」

と高声に唱えて、感悦髄（ずい）にとおり落涙千行の中に、念仏一門に帰られたのであります。ここに日本にはじめて浄土の門をひらかれて、選択本願の念仏を勧めて下さったのであります。

かくて三学の器でない者、従って真実の智恵もなく、無我の境も得られぬ地獄一定の者に弥陀の大悲大願による救済の道が開かれたのであります。親鸞聖人もまた「いずれの行もおよび難く、生死を離れ得ない」身に、恩師上人のお勧化を蒙られて弥陀仏の心光に照護せられたのであります

この浄土の救済を蒙る有様をたとえて見れば「子供がパンを持って庭で遊んでいる時、隣家の犬がとびこんで来てパンを求めて吠えつくと、子供はワアーと泣く。その声に母親が飛び出して子を抱きあげると、子供は怖い犬がおそろしくなくなって、パンを千切って犬に与え犬と遊ぶようになる」そのように、我執我慢の猛犬を怖ろしがりながら万策つきて逃げまどう身も、大悲の心光に満足せしめられる時「我」があるまんま、「我」の角を縁として念仏にかえらせて頂く道がひらけるのである。無碍とは、さわりがあるまんまさわりがさわりとならなくなることと聞いています。

四国の庄松同行の逸話に「今日の御縁は有難かった、如何に我慢の私も角が折れた」と喜んでいる或同行に「そんなにありがたかつたか、しかしなあ折れた角はまた生えるぞ、生えてるまんまと何故聞かなんだ」と警告しています。角と離れ給わぬ大悲一つが何時までもたのもしい限りであります、有碍のまんま無碍の徳光を蒙るのであります

この仏力自然によりて開けてくる道は、われにしてわれならぬめぐみの道であります。古歌に、

塵ほどもよきことあれば迷うのに何もないのでわしは
しあわせ

とあるように、ほこるべき何ものもないことが知らされまた、卑屈の心も洗われて、わがうちにわれにしてわれならぬ徳光を讃仰申すばかりであります。

しかし久遠の妄執に動かされてきた身には、ともすれば仏より恵まれたものをわがもの顔にし、油が水に浮いたように、いつの間にか独善と孤高におち自ら苦しみ他をも悩ますというやりそこないを続けるにつけ、摂取不捨の御誓

いのなみなみならぬことを覚えるのであります。もしやりそこないのない私共であれば、摂取だけで、不捨は無用でありますが、逃げずめ、脱線しずめの私だから、何処までも捨てじ放さじの御誓いがあらわれて下さるのであります

近角常音先生の常のお言葉に

「またやりそこない、またやりそこない

それだからお呆れないお慈悲でないか」

とありますが、私の病気中御見舞い下さって、短冊に書き残して下さったのであります。やりそこないのやまぬ者をお見捨てない大悲ましまして、いよいよ大悲大願のたのもしさを渇仰申すことであります。

八月末に亡くなられた白井先生の『聞法録』こ臼杵祖山和上の教えについて次のように述べていられる。

法を聞くとは厳しいことである、我れすでに法を聞き得たと思うところに直ちに慢心が起こる。そこに忽ち懈怠の行為がはびこる。…弥陀の本願を聞き念仏申す、その信心海をいつのまにか一つの教義定説のように妄想して、その型の中に入っていなければ、所謂異安心に堕ちるのだ、と固く執る。この傾向が私には多分にある。則ち仏法を単なる概念的思惟の理論として執り、これを身に味うことに懶い。この性癖にうち克って法を味えば味うほど法は辺際もなく涯底も無く広く深いものであるに違いない。臼杵和上の語られた所はこの広く深き法味の愛楽であられたのに、教義の単なる型を執りてこれを墨守しようとするところに私の間違いがあった。

その後京城に帰ってから、私はいつのまにか寂しい気に囚われてしまった。朝夕仏前に勤行し聖教を読んでも心の寂しさをどうすることもできない。こんな筈ではなかったのにとお念仏を申しても喜びもおこらず雄々しい気も湧かない。私は自ら疑った、今まで得たと思いこみ他にも述べた信心に何か間違いが潜んでいるのでないだろうか、どうも変だ、このままでは居られないと、この疑惑に囚われてどうすることも出来ないままに、私は海を渡って九州の中津に臼杵和上をたづねまいらせた。

和上はそのとき丁度今大掃除を終ったところでしたと云って畳を入れたばかりのガランドウの室に私を迎えて下された。「お念仏申しても先生の比叡山の御講筵の時のような喜びも湧かず、浄い心にもなられず、私には砂を嚙むようなお念仏しか申されません、今までいただいていた信心に何か間違いがある故でしょうか」とお尋ね申しあげたら和上はしばらく黙して私を見ておられたが、やがて静かに語られました。

「あなたがたから私共僧侶の生活を御覧になると、何か

浄い尊いもののように感ぜられるかも知れませんが、決してそんなものではなく、恥ずかしいことですが僧侶の生活にはあなたがたの想いも及ばないような堕落がつきまつわっている。私の申す念仏も、あなたの想われるような浄い喜ばしいものではなくて、砂を嚙むというか、蠟を嚙むというか、あさましい念仏しか申されません」

と。私は驚いて和上の御顔を仰ぎながら、私の耳を疑った、言葉も出ないで。するとたちまち和上の御言葉が響いた

「けれども南無阿弥陀仏はありがたい御言葉ですな！」

と「ああそうですか！」私はおぼえず稽首してそう云った。私の胸からもやもやした塊が抜け去って、清風が吹き込んできたような気がした。

和上は私を中津の駅まで見送ってくだされた。汽車の窓からあの白い長いお髯を風になびかせて一人立っておられる和上の御姿がおがまれた。

以上の想出を誌されています。歎異抄九条の、はるばる老聖人をおたずね申して、念仏申しながら、おどりあがる喜びもなく、浄土にいそぎまいりたい心のおこらぬことを不審に思いあだかも重病人が名医の診断をうけるに似た緊張さで申上げた時、「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてありけりよくよく案ずれば天におどり地におどりてもよろこぶべきことをよろこばぬにていよいよ往生は一定と思いたまうべきなり、…よろこぶべきこころをおさえてよろこばせざるは煩悩の所為なり、しかるに仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよいよたのもしく覚ゆるなり」と同座して下さっての聖人の御教化と、臼杵、白井の両先生の御対面とは全く符を合わせるごとくであります。

『観無量寿経』に「諸仏如来はこれ法界身なり。一切衆生の心想中に入る」とありますが、聖人と臼杵老師をとおして我等煩悩心の隅々まで入りみちて下さる如来の広大無辺の真実のおいのちにふれるのであります。易行院法海師が

武蔵野のチリチリ草の露だにも　身をほそめてぞ月は入りぬる

明らけき光を四方の限りにて月の内なる武蔵野の原

と讃仰せられたことも思い浮かびます。

親鸞聖人の生涯をつくされて私なき御姿で仏徳を讃仰されて私共迷妄の身に灯火を掲げて下さったことは、如来の御使と信ぜずにはいられません。又蓮如上人がその無我の信徳自然の風光を高く掲げて自我の牢獄に閉じかちの私共を引接下さることによっていよ〳〵聖徳をあきらかにして下さいました、恩徳まことに謝しがたきことであります。

あとがき

年の瀬となりました、インフレの風も冷たく、石油不足等々騒然としたうちに歳月は音もなく流れて行きます。善導大師の『往生礼讃』の日没無常偈、

人間忽々として衆務を営み
年命の日夜に去ることを覚えず
灯の風中にありて滅を期し難き如し
忙々たる六道定趣無し
未だ解脱して苦海を出ずることを得ず

云何が安然として驚懼せざらん云々をひしひしと身に感じさせられるこの頃であります。

× × ×

近角先生の「人生真実の渕源」は大正七年のものでありますが、日露戦争後の人生問題に行きつまった時信仰問題が勃興したが、大正七年頃は欧洲戦争で外貨が流入し、物質的欲望や投機的成功に眼を奪われ、宗教を軽視した有様をのべられて、真実の信仰を懇切に勧められたものでありますが、現在の日本も亦、敗戦時の窮乏と苦難と戦災死にあえいだ時はすくなくとも真面目に求道する人々も見られましたが、経済は成長し、資源もない国にあって消費経済を美徳とさえ唱えたのも夢と消え、真剣に一人一人が時局に対処せねばならぬのに、未だ見はてぬ夢に右往左往し、よるべない流浪が始まっています。そうした渦中にあって、

如来の作願たずぬれば苦悩の有情をすてずして廻向を首としたまいて大悲心をば成就せり

の和讃は、私共の生のよるべ、死の帰するところを告げて下さるのであります。

最近、盲聾者教育の会が報告され、目も見えず、音も聞こえず、したがってものも言えない孤独の魂に広い世界に羽ばたきさせようと苦心し献身しているのを知り、私自身が聾、盲、唖者であると省みさせられると共に、この私にかかりはてて下さる釈迦・弥陀二尊をはじめとし高僧・知識・信友の苦労がいよいよ仰がれました。

故、安波医師の体験録は生のよるべと死の帰すところを不治の病中に体得された実録であります。

山本師の原稿は長崎の平岡さんに頂いた書物から転載いたしました。

木村さんの「求道の歴程」は目下執筆して下さっていますが やがて掲げます。

「仏法は無我にて候」は十月末、北米仏教会理事の方や留学生の人々に、来年、開教七十年の記念の時、蓮如上人のお心をお味い下さり、聖人の生誕八百年の新出発にして頂きたい為めから述べましたものであります。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半。一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル。

○毎月二十四日。午前午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駅上町二ノ八八　慈光社
　　振替口座名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号四五七

慈光　第二十五巻　第十二号　昭和四十八年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可